

月例研究会（2021年10月27日）

空襲体験記の原稿を読む

— 『東京大空襲・戦災誌』
原稿コレクションの整理と分析

山本 唯人

1973年、東京空襲を記録する会によって編纂された『東京大空襲・戦災誌』第1巻の入稿原稿のデジタル化とその分析・活用方法の研究を進めている。本報告では、この原稿の資料整理から分かったこと、および、原稿の事例研究を通して、書籍として刊行された空襲体験記を、原稿から読み直すことで分かることや、歴史叙述に活用する可能性について検討した。

ここで検討した「原稿」とは、1970年8月から1年程度をかけて、東京空襲を記録する会が『東京大空襲・戦災誌』を編纂する目的で収集・作成した体験記の入稿原稿に関する史料群（東京空襲を記録する会・東京空襲体験記原稿コレクション）である。記録する会による体験記の収集は、1970年代の個人の戦争体験を記録し、既存の戦争像を問い直す代表的な実践の一つとされる。本原稿コレクションは、記録する会によって収集された体験記の実態と編集過程を示す原史料と位置づけられる。

先行研究をもとに、2つの論点を整理した。

1) 1980年代以降、戦争体験記を使った叙述の登場：家永三郎は『太平洋戦争』第2版（1986年刊）で、体験記の意義を強調すると共に、体験記は「記憶違い」や事後的な「事実の変形」を伴うことが多いので、独自の史料批判／読解の方法論が必要と指摘した。ただし、体験記を「一概に史料的価値が低い」と考える立場とは一線を画し、適切な批判によって、体験記を「史料」として活用できると述べていたこ

とは注目される。では具体的に、どのような史料批判や読み解きが可能なのかを、原稿に即して示すことが、第一の論点となる。

2) 2010年代以降、「個人によって書かれた文書」への関心の高まり：personal narrative（個人の語り／叙述）、エゴ・ドキュメント（自己文書）、日記などの研究では、「書く（＝叙述する）行為」を通じた主体／史料形成のプロセスが、記録を批判的に読み解く手がかりとして注目された。こうした研究を踏まえ、本原稿コレクションについて、体験記の執筆・編集の過程でどのような情報の取捨が行われたのか、体験者にとって体験記を「書くこと」にどのような意味があったのか、過去の体験や戦争をどのように意味づけようとしたのかなどを、原稿や付属する文書などから読み取ることが、第二の論点となる。

本原稿コレクションの資料整理と、深川区の章に収録されたある原稿の事例研究から以下のことが明らかになった。

1) 本原稿コレクションからは体験記の「原文」と編集者による「編集情報」という2タイプの情報を読み取ることができる。

2) A氏（空襲当時深川区石島町在住）の体験記原稿の「原文」の読解から、体験記には読者に伝わるかどうかを何度も推敲し、第三者のチェックを経て書かれたものがあると分かった。

3) 同じ原稿の編集情報（赤字部分）の読解から、長い原稿の場合、①他者の言動、②空襲の「前」と「後」の記述、③執筆者の主観などが削除される傾向があることが分かった。

4) 同じ原稿について、付属文書（手紙）や記録する会の団体史料、コラム記事などと照合することで、執筆時期の特定や執筆の経緯、空襲体験の受け止め方の変化を把握できた。

（やまもと・ただひと 法政大学大原社会問題研究所准教授）